

津 端 亨 編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
28卷

現代短歌分類辞典

新装版28卷

通卷 1 8 6

平成四年十二月十八日発行

定価一六、〇〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒345

埼玉県北葛飾郡杉戸町宮前一九六―五

電話(〇四八〇)三八―〇〇四〇番

振替 東京三―九三―一四

(ISBN4-87706-186-X)

目

次

目次	歌数	頁数	歌数	頁数	歌数	頁数
たく〔卓〕	三二	一	たくせい〔濁世・ちよくせい〕	二	三	七
たく〔鐸〕	二	九	たくせい〔濁声〕	三	三	六
たく〔炊く〕	三	九	たくだ	一	三	九
たく〔焚く〕	二九	〇	たくち〔拓地〕	五	三	一
だく〔抱く〕	二九	七	たくち〔宅地〕	三	三	一
たくあん〔沢庵〕	三	三	たくちぞうせい〔宅地造成〕	一	三	一
たくあんづけ〔澤庵漬け〕	三	三	たくと〔タクト〕	一	三	一
たぐい〔類い・比い〕	一六	四	たくはつ〔托鉢〕	一三	三	二
たぐひなき	四	六	たぐい〔比〕	一	三	一
たぐう〔類う〕	二	九	だくひ〔諾否〕	一	三	一
たぐさ〔田草〕	四七	九	たかだか〔高高〕	三	三	一
たぐさ〔手草〕	二	三	たくとう〔卓灯〕	一	三	一
たぐさん〔沢山〕	二七	三	たぐふ〔卓布〕	四	三	一
たくし〔卓子〕	五	三	たぐふ〔類ふ・比ふ〕	一	三	一
たくしい〔タクシー〕	三	三	たぐふすま〔袴袈〕	一	三	一
たくじしよ〔託児所〕	一	三	だくふむ〔だく踏〕	一	三	一
たくじよう〔卓上〕	九	三	だくぼく〔凸凹〕	二〇	三	一
だくしよく〔濁色〕	一	三	たくほん〔拓本〕	七	三	一
たくす〔託す・托す〕	九	三	たくま〔琢磨〕	三	三	一
だくすい〔濁水〕	二	三	たくまざる〔巧まざる〕	四	三	一
たくする〔託する・托する〕	一	三	たくましい〔逞しい〕	八	三	一

たけ〔葺〕	九	七	だけど	二	八	たけやぶ〔竹藪〕	一六
たけ〔他家〕	八	三	だけでも	一	八	たけやま〔竹山〕	一
たけ〔葦〕	一	三	たけなが〔丈長〕	一四	八	だけやま〔だけ山〕	一
だけ〔丈〕	二七	三	たけなわ〔酣蘭〕	四	八	たけやり〔竹槍〕	六
たげい〔多芸〕	一	一	だけに	六	八	たけりくるう〔猛り狂う〕	一
たけうま〔竹馬〕	八	一	たけにぐさ〔竹煮草・竹似草〕	六	八	たけりたつ〔猛り立つ〕	一
たけえん〔竹縁〕	二	九	たけのあき〔竹の秋〕	二	八	たける〔哮る〕	九
たけがき〔竹垣〕	四	九	たけのかわ〔竹の皮〕	八	八	たける〔猛る〕	一五
たけかご〔竹籠〕	二〇	八	たけのこ〔竹の子〕	九	八	たける〔長ける・闌ける〕	一
たけがみ〔竹紙〕	一	八	たけのこほり〔筍掘り〕	一	八	たけーる〔焚ける〕	一
たけがり〔葺狩り〕	四	八	たけのさとうた〔竹の里歌〕	二	八	だけれども	二
だけかんば〔岳樺〕	四	八	たけのその〔竹の園〕	二	八	たげん〔多元〕	一
だげき〔打撃〕	一	八	たけのは〔竹の葉〕	一五	八	たこ〔風・紙鳶〕	一九
たけきり〔竹切り〕	二	八	たけのみ〔竹の実〕	二	八	たこ〔胼胝・胝〕	七
たけぐし〔竹串〕	一	八	たけはし〔竹箸〕	二	八	たこ〔蛸・蛸・章魚〕	四
たけくらべ〔丈比べ〕	二	八	たけはし〔竹橋〕	二	八	たご〔田子〕	五
たけぎいく〔竹細工〕	三	八	たけはしご〔竹梯子〕	二	八	たこあげ〔風揚〕	五
たけざお〔竹竿〕	八	八	たけばやし〔竹林〕	二七	八	たこいと〔風糸〕	二
たけーし〔長けし〕	五	八	たけび	一	八	たこう〔多幸〕	一
たけしま〔竹島〕	五	八	たけぶ〔猛ぶ〕	三	八	たこう〔他郷〕	三
たけしまゆり〔竹島百合〕	一	八	たけぶえ〔竹笛〕	一	八	だこう〔蛇行〕	九
だけつ〔妥結〕	二	八	たけぼうき〔竹箒〕	四	八	たこく〔他国〕	一八
たけづつ〔竹筒〕	一五	八	たけむら〔竹群・竹叢〕	一五	八	たごし〔田越〕	一
たけーて〔闌けて〕	九	八	たけや〔竹屋〕	六	八	たこつば〔蛸壺〕	六

目	次						
たごとのつき〔田毎の月〕	三	一二	たしだしに	九	二四	たすう〔多数〕	八 一三
たごのうら〔田子の浦〕	七	一二	たじつ〔他日〕	一	二四	たずゑ〔田末〕	一 一四
たごのぶらく〔田子の部落〕	一	一二	たしつ〔多目〕	一	二四	たすかる〔助かる〕	七 一四
たこぶね〔蛸船〕	一	一二	だしーて〔出して〕	二	二四	たすき〔褌〕	四 一四
たこん〔多恨〕	三	一二	たしなみ〔嗜み〕	一八	二四	たすきがけ〔褌掛け〕	一 一五
たさい〔多才〕	一	一二	たしなむ〔嗜む〕	三	二四	たすく〔助く〕	一 一五
たさい〔多彩〕	四	一二	たしなめる〔嗜める〕	一	二五	たすけ〔助け〕	七 一五
だざいおさむ〔太宰治〕	三	一二	だしぬけに〔出し抜けに〕	二六	二五	たすけあい〔助け合い〕	三 一七
だざいふ〔太宰府〕	七	一二	たしや〔他社〕	一	二六	たすけーられーて	三 一七
たさつ〔他殺〕	一	一二	だしや〔打者〕	二	二六	たすさう〔携う〕	一 一七
たざわこ〔田沢湖〕	七	一二	だじやく〔懦弱〕	一	二六	たずたずしい	二 一八
ださん〔打算〕	七	一二	だしゆ〔舵手〕	三	二六	たずたずしさ	一 一八
たし	二四	一二	たしよ〔他所〕	八	二六	たずねる〔訪ねる〕	二 一八
たじ〔他事・ひとごと〕	五	二五	たしよう〔多少〕	四	二六	たずねる〔尋ねる〕	三 一八
だし〔山車〕	一七	二五	たじよう〔多情〕	三	二六	たぜい〔多勢〕	五 一八
たしか〔確か〕	八	二六	たじようたこん〔多情多恨〕	二	二六	だせい〔情性〕	七 一八
たしかさ〔確かさ〕	四〇	二八	たしよく〔多食〕	一	二六	たぜり〔田芹〕	九 一八
たしかな〔確かな〕	一	二九	たじろぐ	四	二六	たそがれ〔黄昏〕	六 一九
たしかに〔確かに〕	一四	二九	たしろこ〔田代湖〕	三	二七	たそがれのふゆ〔黄昏の冬〕	一 一九
たしかむ〔確かむ〕	二九	二三	たしろぬま〔田代沼〕	四	二七	たそがるる	一 一九
たしかめる〔確かめる〕	三	二三	だしん〔打診〕	五	二六	ただ〔直〕	九 一五
だしきる〔出し切る〕	一	二三	たす〔足す〕	六	二六	ただ〔唯〕	一 一九
たじたじ	一	二三	たず〔田鶴・たづ〕	一四	二六	だたい〔堕胎〕	一 一九
たじたじと	四	二三	だす〔出す〕	一六	二三	ただいま〔只今〕	三 一九

たとう〔湛う〕	一六	ただちに〔直ちに〕	一六	たち〔立ち〕	七
たたふーる〔称ふる〕	三	ただなか〔只中〕	一六	たち〔太刀〕	二九
たたへーぬ	一	たたなづく	一五	たちあおい〔立葵〕	二〇
たたえる〔湛える〕	七	ただならず	一五	たちあがりぎわ〔立ち上り際〕	一
たたえる〔称える〕	二	たたなわる〔疊なわる〕	一四	たちあがる〔立ち上がる〕	二
たたかい〔戦い〕	三	ただに〔唯に〕	三	たちい〔起居〕	一
たたかう〔戦う〕	六	ただびと〔只人・直人〕	六	たちいず〔立ち出ず〕	二
たたき〔敲・叩〕	一	だだびろい〔徒広い〕	一	たちいり〔立ち入り〕	八
たたきおとす〔叩き落とす〕	一	たたふ〔湛ふ〕	二	たちいる〔立ち入る〕	一
たたきころす〔叩き殺す〕	二	たたまる〔畳まる〕	二	たちえ〔立枝〕	一
たたきつける〔叩き付ける〕	二	たたみ〔畳〕	二〇	たちおくれ〔立ち後れ〕	四
たたきつぶす〔叩き潰す〕	二	ただみがわ〔只見川〕	一	たちおとし〔截ち落し〕	一
たたく〔叩く〕	二六	たたみめ〔畳目〕	三	たちかえり〔立ち返り〕	一
ただごえ〔直越〕	一	たたむ〔畳む〕	九	たちかえる〔立ち返る〕	二
ただごと〔只言・徒言〕	二	ただむかふ〔直向〕	二	たちかかる〔立ち掛かる〕	二
ただじ〔直路〕	三	たたむき〔腕〕	一	たちかれ〔立ち枯れ〕	三
ただしい〔正しい〕	五	ただよくだる	一	たちかわ〔立川〕	五
ただしく〔正しく〕	四	ただよう〔漂う〕	四	たちかわ〔立川〕	三
ただす〔糺す〕	一四	ただよわし〔漂わし〕	八	たちき〔立ち木〕	四
ただす〔正す〕	三	ただよわす〔漂わす〕	三	たちぎえ〔立ち消え〕	三
ただす〔質す〕	九	たたり〔崇り〕	七	たちぎき〔立ち聞き〕	一
たたずまい〔佇まい〕	四	ただれ〔爛れ〕	九	たちぎく〔立ち聞く〕	三
たたずむ〔佇む〕	一五	たたん〔多端〕	一	たちきる〔断ち切る〕	二
ただただ〔只只・唯唯〕	一七	たち	三	たちぎわ〔発ち際〕	三

たちくく	一	二三六	たちならびたる〔建ち並びたる〕	一	二四〇	たちわる〔断ち割る〕	二	二六八
たちぐさいね〔立ち腐れ稻〕	一	二三六	たちならぶ〔立ち並ぶ〕	五	二四三	たちゐる〔佇ちゐる〕	一	二六八
たちくだる〔立ち下る〕	一	二三六	たちぬる	一	二四二	たつ〔立つ〕	一七二	二六八
たちくる	四	二三六	たちのき〔立退〕	二	二四二	たつ〔建つ〕	二三	二六八
たちこむ〔立ち込む〕	四	二三七	たちのぼる〔立ち上る〕	六	二四二	たつ〔発つ〕	七	二六八
たちこむる	一	二三七	たちば〔立場〕	三	二四三	たつ〔経つ〕	六	二六〇
たちさる〔立ち去る〕	二	二三七	たちはだかれる	一	二四四	たつ〔断つ〕	五	二三三
たちさわぐ〔立ち騒ぐ〕	三	二三六	たちばな〔橘〕	二九	二四四	たつ〔絶つ〕	二	二三三
たちそひーながら	一	二三六	たちばなし〔立ち話〕	五	二四六	たつ〔裁つ〕	七	三四四
たちそう〔立ち添う〕	七	二三六	たちふうろ〔立風露〕	一	二四七	だついじょう〔脱衣場〕	九	三四四
たちそへーる	一	二三六	たちまくら〔太刀枕〕	一	二四七	だついばこ〔脱衣箱〕	一	三四四
たちーたる	二	二三六	たちまさる〔立ち勝る〕	三	二四七	だつかい〔奪回〕	一	三四四
たちつぎ	一	二三六	たちまじる〔立ち交じる〕	四	二四七	たつがみ〔立髪〕	一	三四四
たちつくす〔立ち尽くす〕	八	二三六	たちまち〔忽ち〕	八三	二四七	だっかん〔奪還〕	二	三四四
たちつつ	二	二三六	たちまち〔一七夜〕	一	二六六	たつき〔活計〕	七	三四四
たちつづく〔立ち続く〕	七	二三六	たちまう〔立ち舞う〕	二	二六六	たづき	一	三四六
たちーて〔佇ちて〕	二	二三六	たちもどる〔立ち戻る〕	一	二六六	だっきやく〔脱却〕	一	三四六
たちどおし〔立ち通し〕	一	二三六	たちやすし	一	二六六	だくすふんど〔ダックスフンド〕	一	三四六
たちどころに〔立ち所に〕	二	二三六	たちゆく〔立ち行く〕	六	二六六	たづくり〔田作り〕	三〇	三四六
たちどまり〔立ち止まり〕	二	二三六	だちよう〔駝鳥〕	五	二六七	たづくり〔手作り〕	三	三四七
たちどまる〔立ち止まる〕	一	二三六	たちよみ〔立ち読み〕	二	二六七	たづくりびと〔田作人〕	一	三四七
たちなおる	一	二三六	たちよむ〔立ち読む〕	二	二六七	たつくる〔タツクル〕	四	三四七
たちーながら	一	二三六	たちよる〔立ち寄る〕	二	二六七	たづくるわざ〔田作業〕	一	三四七
たちなげく〔立ち嘆く〕	一	二三六	だちゅらあ〔ダチュラー〕	二	二六八	たっけん〔卓見〕	一	三四七

だっこ〔抱っこ〕	四	三七	たつとぶ〔貴ぶ〕	三	三〇	たてえり〔立襟〕	一	三〇
だっこう〔脱肛〕	一	三八	たづな〔手綱〕	四	三二	たてがみ〔立て髪〕	四九	三〇
だっこく〔脱穀〕	三	三八	たつな〔立つ名〕	一	三三	たてかんばん〔立て看板〕	一	三二
だつごく〔脱獄〕	二	三八	たつなみそう〔立浪草〕	二	三三	たてぐ〔建具〕	二	三二
だっこくき〔脱穀機〕	八	三八	たつの〔竜野〕	二	三三	たてごと〔竖琴〕	一	三二
だつし〔脱脂〕	三	三八	たつのくち〔竜の口〕	一	三三	たてこむ〔立て込む〕	一	三二
だつじ〔脱字〕	二	三八	たつのひげ〔竜の髯〕	三	三三	たてこめる〔立て込める〕	一	三二
たつしゃ〔達者〕	四	三八	たづぬ〔訪ぬ〕	一	三三	たてきによこさに〔縦さに横さに〕	一	三二
だつしゅ〔奪取〕	三	三八	あづねびと〔訪ね人〕	一	三三	たてしな〔蓼科〕	三四	三二
だつしゅ〔ダッシュ〕	二	三八	たつのみや〔竜の宮〕	二	三三	たてしなこうげん〔蓼科高原〕	二	三三
だつしゅつ〔脱出〕	三	三九	だつび〔脱皮〕	三	三三	たてしなーのーやま〔蓼科の山〕	四五	三三
たつじん〔達人〕	四	三九	たつびつ〔達筆〕	一	三三	たてじま〔縦縞〕	一	三三
たつす〔達す〕	五	三九	たつぷり	六	三三	たてじわ〔縦皺〕	一	三三
だつせん〔脱線〕	二	三九	だつぼう〔脱帽〕	六	三三	だてすがた〔伊達姿〕	一	三三
だつそう〔脱走〕	二	三九	たつまき〔竜巻〕	九	三三	たてつく〔楯付く〕	三	三三
たつた〔唯〕	九	三九	たつみ〔辰巳〕	四	三四	たてつけ〔建て付け〕	六	三三
だつたい〔脱退〕	一	三〇	だつもう〔脱毛〕	三	三四	たてつづく〔建て続く〕	一	三四
たつたいま〔唯今〕	二	三〇	だつらく〔脱落〕	四	三四	たてなおし〔立て直し〕	一	三四
たつたがわ〔立田川〕	一	三〇	たつーらしーも	一	三四	たてなおし〔建て直し〕	一	三四
だつたんそば〔韃靼蕎麦〕	一	三〇	たて〔楯・盾〕	三	三四	たてなおす〔建て直す〕	一	三四
たっち〔タッチ〕	六	三〇	たて〔縦〕	六	三五	たでのほ〔蓼の穂〕	一	三四
たづち〔田土〕	一	三〇	たて〔蓼〕	一九	三五	たてばやし〔館林〕	一	三四
だつて	四	三〇	たてあな〔竖穴・縦穴〕	二	三〇	たてふだ〔立札〕	一	三四
だつとう〔脱党〕	二	三〇	たていた〔立板〕	一	三〇	だてまき〔伊達巻〕	一	三四

たてまし〔建て増し〕	二	三〇	たとへーん	一	三〇六	たなばた〔七夕〕	六	三〇七
たてます〔建て増す〕	一	三〇	たどり〔辿り〕	三三	三〇六	たなばたひめ〔棚機姫〕	二	三〇八
たてまつる〔奉る〕	一七	三〇	たどりたどり〔辿り辿り〕	二	三〇一	たなばたまつり〔七夕祭り〕	三	三〇八
たてもの〔建物〕	二二	三〇	たどりつく〔辿り着く〕	九	三〇一	たなびき	二〇	三〇八
たてやま〔立山〕	一	三〇	たどりよむ〔辿り読む〕	一	三〇三	たなびきわたる	二	四〇三
たてやま〔館山〕	三	三〇	たどりゆく〔辿りゆく〕	四	三〇三	たなびく〔棚引く〕	二〇	四〇三
たてよこ〔縦横〕	三〇	三〇	たどる〔辿る〕	一七	三〇三	たなれ〔手馴れ〕	六	四〇七
たてよこぎまに〔縦横ぎまに〕	一	三〇	たどるたどる〔辿る辿る〕	三	三〇六	たなん〔多難〕	一	四〇八
たてらく	三	三〇	たどん〔炭團〕	二〇	三〇六	たに〔谷・谿・溪〕	二〇	四〇八
たてる〔建てる〕	三六	三〇	たな〔棚〕	二七	三〇六	たに〔壁蝨・ダニ〕	二	四〇五
たてる〔立てる〕	二〇	三〇	たないた〔棚板〕	一	三〇三	だに	三〇	四〇五
たでん〔打電〕	三	三〇	たなぎよう〔棚経〕	一	三〇三		合計	一九七三首
だとう〔打倒〕	六	三〇	たなぐも〔棚雲〕	三	三〇三			
たとえ〔譬え・喩え〕	三	三〇	たなぐも〔棚蜘蛛〕	一	三〇三			
たとえば〔例えば〕	三	三〇	たなぐもり〔棚曇り〕	六	三〇三			
たとき〔方便〕	五	三〇	たなご〔店子〕	三	三〇三			
たときをしらに〔方便知〕	一	三〇	たなごころ〔掌〕	一六	三〇三			
たどく〔多読〕	一	三〇	たなした〔棚下〕	一	三〇四			
たとしえ〔譬しへ〕	三	三〇	たなしらに〔全不知〕	一	三〇四			
たどたど	二九	三〇	たなしる〔たな知る〕	一	三〇四			
たどたどし	三	三〇	たなすえ〔手末〕	三	三〇四			
たどたどしき	一三	三〇	たなそこ〔手底〕	七	三〇四			
たどたどしき	四	三〇	たなだ〔棚田〕	七	三〇五			
たどつ〔多度津〕	四	三〇	たななし〔棚梨〕	一	三〇六			

活けて見る水引草の穂を長み卓の書冊をわきに移せり (新萬葉集三)

石敷きし歩道の隅に卓ならべ朝餉をひさぐ露天食堂

石の卓撫でつつふともありし夜の夢思ひいでわと泣くわれは⑭

いたましき我が身の果てを見るごとし酒場の卓にうつむける顔①

いたましと憂しと親のおもへ勉強の卓になれて子は疑はず②

一途なる人の主張のことわけに「六法」反れり卓のひなたに②

一年ぶりに親子揃ひて卓かこみ死産の孫にふれず飯食ふ①

一椀の汁に食べすする貝殻を積み惜しまず夕餉の卓に④

一顆のこの果実のもつ気品あたりを払ふ卓の上にして⑩

いつしかいつしか背くぐまりつつ卓にをりわれにかへりては悲しめる

かな④

岩崎氏書斎なりける卓の上見よ稀観なるこれら古蔵書⑯

今も猶君と祈りし秋の夜の卓の冷たさえわすれずあり②

うす藍の伊万里の小鉢二つ三つならべる見れば卓の上すずし (新萬葉集五)

薄みぞれ漆のはげし古椀のふせられてある朝の卓かな

内ふかく包むいかりはいはねども灯の卓に軽く酔はされてをり①

打向ふ二人の卓に宵毎にうましといひて飯たべにけり (現代短歌大系)

美しき気泡のぼらせ卓におくソーダ水と細き鉛筆①

美しくし箱根の箱を卓に置き友楽めり紅梅に代へ②⑨

美しく交す会話の続きあるうしろの卓の清き無縁あり④

現世にかくの如くに親子四人夕餉の卓に向ふひととき②

うづ高く履歴書積める卓に倚り思ひ上される身を省みぬ (新萬葉集六)

訴へて卓のむかふにうつ伏せば二十代と言ふ語を憎むのみ④ (角川文庫)

うつむきて氷菓をふくむ卓の隅火傷の痕のまざとある顔①

久保 猪之吉

上山 幸子

與謝野 晶子

萬造寺 齊

白井 大翼

白井 大翼

菊山 当年男

長沢 美津

吉植 庄亮

土岐 善麿

窪田 空穂

前田 夕暮

対馬 完治

熊谷 武雄

大野 誠夫

進藤 恵美子

馬場 あき子

與謝野 晶子

初井 しづ枝

山田 百合子

野田 まさる

近藤 芳美

大野 誠夫

海の風灯かげ涼しく吹き通り夕餉の卓のさざめきたのし

雲仙の山のホテルの朝の卓に山草の実のま赤きをめづ

えらび終へし君らが歌稿卓におきいくらかの稿料といま代りたり①②

老い父と卓に今あり歳晩のそば食ふ父は目をしばたく⑤

大方の齒のなくなりて飯食めば飯をぞこぼす飯店の卓に⑬

大きな主筆の卓のかたすみのほちの秋草さきそめにけり

置きてみつ卓の上に曳く影のほひやかなる丸き手鞠を①

送られし甘柿いくつ秋の灯の卓にならべてこころ幼し①

落着きし日はあらざりき卓をいだし蘭を清めて何かねむたし①

弟の妻あるじのぬをくやみつにぎはふ卓に松茸かをる①

訪ひ来し吾子兵なる吾子の軍帽は卓の上に正しく置かれてありぬ④

大きな音たまたまにして卓の上萼離れて桐の花落つ⑦

大きな君の告別式終へて寄る三人茶房の卓にながく坐りぬ①

大きな卓新聞切抜に風避けて三人だまれり午後のむし暑さ⑩

大きな主筆の卓のかたすみの、はちのあき草、さきそめにけり。②

大輪の白菊をかこみくれないの小菊匂へり今宵の卓に

想ふ事一つに溶くる子と許婚の有るは笑ましも家居の卓に①

おもむきの嬉し「鷗」と云ふ船の古りし板もて造りたる卓①

女たちかの卓に在り男のみ雪の夜寒を語るこの卓⑬

帰りきて卓に手帖を置くとときに無為にして過ぎし日と謂はざらん④

省みて痛き言葉を放つとき卓に顛へる緋タリヤの花⑤

帰るべき部屋を平凡に思ふ心相寄る卓に雨は聞えて③ (角川文庫)

顔よせて息うつくしく紅薔薇の接吻する闇のカフェーの卓①

顔よせて卓の電話にかがみある娘にもかりそのの倅せはあらむ

村野 次郎

佐佐木 信綱

中野 菊夫

遠山 光栄

松村 英一

土岐 善麿

荒木 暢夫

森山 縫子

鹿兒島 壽藏

川浪 磐根

朝吹 磯子

宮 柊二

上代 皓三

土岐 善麿

土岐 善麿

杉田 鶴子

坂井 菊枝

近江 満子

與謝野 寛

佐藤 佐太郎

若林 牧春

近藤 芳美

野沢 柿茸

伊吹 高吉

かかへ来し書類の重み思はずも卓にくづせば埃が眼に入る(多摩三)
 籠にいけしにはこの実は夜の卓に物やはらかきかげをつくれり(豊原)

籠の螢に水ふきおきしことを妻夕餉の卓に居りて言ひ出づ①

笠嶽の頂に採りし薄雪草夜の卓にみてさびしかるなり①

片隅の卓に離れしかの人も寒くやあらん前のさかづき⑩

かたちよき躑躅の紅が灯に映ゆる前なる卓の緑衣の女⑨(瀧の音)

語らへば芝生の卓に指触れぬいつしか繁し山の夕霧⑬

乾杯の音頭に立てば 卓より卓へ みな学究のきびしき表情②⑦

かの卓に細きうなじをのみ見せて在る人清し山の食堂⑪

かへり来てくつろがむとぞするわれを夜食の卓に人の待ちたる⑩

帰りゆきし弟が残せる煙草一つ母も我も捨てず卓の上に置く②

紙ナイフ入れぬミュンヘン医事週間わが卓の上にうづたかくなりぬ

鴨池のすすしき卓に盛られたる桔梗に並ぶ桜鳴かな⑫

飯店の粗き卓に間いりし熱きココアをあなどれなく②

河岸の夜のカフェーの円き卓にちるアカシヤの葉の青き一ひら⑦

河ぞひに立つる城をあまたみつけふ来て坐る古城の卓③

高粱酒の香り強き驚けり卓の上しづかに杯を置く①

元日に白き牡丹を卓に見ぬ今年のひかり花に始まる⑬

機関区の煤によごれたる卓のうへゆたかに山百合の花活けられて⑥

きざまれた葱のにはひがひとり食ふ夕餉の卓をわびしがらせる①

きざまれて薬味の皿に載る茗荷夕餉の卓を涼しくはする④

帰省せる子も卓により聞き入れり泪さしぐむ眼を伏せて②

北向きのホテルの窓に青き卓レモンを積みて宵のひかりよ①

鈴木 杏村

佐佐木 信綱

金子 信三郎

米川 稔

與謝野 寛

佐佐木 信綱

與謝野 寛

土岐 善麿

與謝野 寛

吉植 庄亮

遠野 左田子

宇都野 研

與謝野 寛

白井 大翼

金子 薫園

高橋 希人

平福 百穂

與謝野 寛

木俣 修

清水 信

塚田 菁紀

山田 百合子

大野 誠夫

黄葉紅葉さやかに風に鳴るところ背囊卓に吾ら飯食す(支那事変戦地)

饗宴にあらぬひとりの卓の上光あつめてデリシヤスがあり⑤

牛乳の壺がしづくをたらしをり夏朝の卓は貧しきにあらざ①

饗宴にあらぬひとりの卓の上光あつめてデリシヤスがあり⑤

京において天台座主はましまさず螺鈿の卓の水仙の花(玉琴)

銀器の凍み響きつつあり寒夜の支那食の卓の水仙の花(多摩二)

銀と珊瑚のリズム模様の卓のよる女もつくれ主情派の女を⑤

金曜日の昼饗の卓に、咲き満ちて、円かにむかふ。紫陽花の碧⑥

草色の茶色の卓に肘つける表はにぶくつやめきひかる①

砕かれし脳裏のかから見る如し片々にさきてメモは卓にあり①

口狭き卓の小瓶はまさかりのグリヤ三花に傾きにけり⑫

くみかはす夕餉の卓のさかづきもけふより後は母なしにして⑧

暗き卓におもひ貧しく飲みほせば小さきグラスと孤りのわれと

グラジオラス昼の日に映ゆる清き卓さきくまさきかれと杯をあぐ(秋の意)

くもなるの薔薇挿す卓にさびしげにひとり酒のむ髪黒きひと⑨

くれなるにはへる梅は大陸の卓の上にて愛でられるむか(のぼり路)

患者らの二三事務執る卓の上海芋の花の白きおちつき③

螢光灯のひかり及べる卓のばら花輪のゆるみをささへてゐたり

劇の中にて見てしたしみし笠智衆氏夫人としづかに近き卓にあり①

消しゴムでノートこすれば卓の花小さくゆれぬ試験の前夜

げにそれはこれなりと迎へ卓上におき並ぶればさらに一冊③⑩

言語革命をあげつらひつつ研究室の火もなき卓にゆふべをむかふ⑥

講堂の卓にいならばはしけやし小受験生は颯爽たりき①

田畑 善兵衛

朝吹 磯子

藤好 淳之

朝吹 磯子

川田 順

佐藤 信春

西村 陽吉

釈 迢空

大野 誠夫

富小路 楨子

尾上 柴舟

太田 水穂

加藤 克巳

佐佐木 信綱

岡野 直七郎

斎藤 茂吉

広野 三郎

真鍋 美恵子

鹿兒島 やすほ

山田 恵子

土岐 善麿

木俣 修

泉 甲二

ごうと鳴り夜の北風の過ぎしかば卓に俯しゐしわれ立ち上る⑥
紅林檎冷えし頼して冬の灯のはのてる卓にした泣きてあり③

ここにも耳許去らぬ田の蛙こよひ一つの卓にむきあふ(清井)

ここに見よこの卓のうへ人々の満ち足りて去りしあとの器を(はつ恋)

コスモスの生けたる卓の一隅はしばし楽しき園樂思はしむ②

コップに活けて卓に据ゑたる水引の花小さけれど紅くしありけり(新萬)

葉集三

悉く切なき夜なり坐らんと来し卓の上に干魚にほひて①

児とたべる皿のサラダの新鮮き野を末る風が卓にあふれて②

事もなくレモン置かるる卓の上その酸の強さ我になじめず①

このあした朝餉の卓を吹く風はもはや涼しきにすぐとぞおもふ①(角川)

文庫

この船の若き事務長と朝の卓ともに囲みて珈琲を食む

この夜さり霜がふるらし卓の上にわが息しるく曇りを走らす(多磨二)

小窓より黄海の月ほのかにも卓なる花を照す船室①

子等寝ねて寂しき卓に栗の皮むくこと久し妻と在りつつ⑥

冴えざえと受話機に秋のひびききて卓に一本紅き鉛筆

酒飲めば笑の出づる妻子らは離りて在らぬ卓の白塩①

寂び寂びと物あらぬ吾れの卓の上に花あかりすも盛り上る薔薇

様々の教材を持ちて子は帰りゆふ餉終れば卓にひろぐる②

去りし人の残像が生き生きと浮びくる物音もなき卓に倚るとき①

山荘の非時の卓をばうちかこみ武庫越えぬべき企てぞする⑦

賛否つねに分かれて卓にへだたりつ君は君の詩もちて企つ②

潮見亭の卓にしづまる月光に來たりてわれの浴衣あかるき②

宮 柊二

尾上 柴舟

岡 麓

土岐 善麿

柴生田 稔

久保 猪之吉

富小路 禎子

清水 信

坂井 菊枝

吉野 秀雄

古泉 千樫

横手 貴志

與謝野 寛

西田 猪之輔

久方 寿満子

千代 国一

宇都野 研

隅田 葉吉

大野 誠夫

與謝野 晶子

馬場 あき子

白井 大翼

四五人が霧台に去りて美しく骨牌の散れる春の夜の卓②(はたちのうた)

蜆汁吾がすすりゐる卓の前に湖青うしてつばくらの飛ぶ③

四川より招びし司厨は茫と云ふ郭沫若の卓のめでたき

しづかなる庭に向へる卓の上に泰山木の莖おつる音①(現代短歌大系)

寂けさや冬の夜更けの卓の上に白南天の実は光りつつ①

師と対ふ紫檀の卓に女郎花散るかそけきも灯光には見つ③

次男の卓がもらひし嫁の顔はみずひそかに嫂と喜び語りき⑬

脂肪食ゆたかに摂りし卓にゐて古き東洋の悲願聴きてゐる(朱夏)

事務室の円き卓の上のこまか花朝すがしき小手毬一枝③

三鞭の蓋あぐる卓のもと一株の蘭のかをりめでたし(遊清吟藪)

シャンデリヤ煌々として卓の上の牡丹の花は翳を示さず②

ジュース飲む友ある卓にはばからずコップのビールわれは飲み干す②

終戦記念日のデパートに人満ちて休憩室の卓に眠る幾人③

十余人夕食の卓に集ひたり鷺津の山は藍がちとなり⑬

「出演者休憩室」の卓の上の香りしづけき白菊の花①

春燈の真下の卓にひと枝の椿しづもれり今日賜はりて①

障子白く閉したる茅屋人はあらず庭に卓すゑて待ちたまひたり

焼酎をのみたる卓を片附くる灯ともる部屋に遠きドアあり③

食終へてひとり夜更を対ふ卓ただ冴えざえと白き塩あり①

食後の暗き卓の上妻が不平いひながらわれの煙草を幾本か巻く③

昇給を祝ふと妻のとのへし夕餉の卓に恥ぢつつむかふ(新萬葉集)

所在なき夜の卓のうへ黒き甲を負ひたる昆虫あゆみてゆけり①

白き烏賊凍むがに冴えてわが卓は一夜の忌に彩みなひそむ②

白き卓に季節の花を剪りて来て楽しと今日も帰る夫待つ②

中原 綾子

岡本 大無

井出 一太郎

広野 三郎

福田 夕咲

若林 牧春

土岐 善麿

真鍋 美恵子

広野 三郎

佐佐木 信綱

高橋 希人

鈴木 光子

広野 三郎

與謝野 晶子

福田 夕咲

安立 スハル

宇都野 研

近藤 芳美

富小路 禎子

広野 三郎

伊藤 一穂

滝口 英子

富小路 禎子

渡辺 信子

白きまひる人はるざりき卓の上髻こき顔のトランプの王③

神仙炉卓の上に煮えそめし音の幽けく昏る窓明り②

心臓を病む子の卓に近づきてカーネーションの紅をさす②

新訳杜詩選第二をつくり得つ初日の卓に一冊をおく②③

水中めがね一つ置きある子の卓を借りて暑き日の仕事に励む②

饅頭きつた酒場の卓のマドモアゼル君の今夜の化粧をお見せ⑤

すがすがしく翁さびいます卓の前ぶだうの露をわれもすすりぬ②⑥

スタジオに踊り疲れて蒸し焼の若雛を裂く饗宴の卓④

吸ひさしの煙草燦れるキリコ皿灯影映れる卓の冷たき②

政治家の父の卓見はたくましくいまの現をうちひびかしむ⑨

戦没の学徒をしのお夜のつどひ手記いく片も卓にならべて⑦

ゼンマイなど覆ふ硝子のかぶせいくつ童活の城のごとき卓見ゆ①

僧院の窖に入り卓のうへに葡萄酒の酒を持ち来らしむ④

それならば僕にもいはせろあれからまだ食卓一つ買へずにゐる⑦

タイプライターしきりに鈴をならしつつ入り来し部屋の灯の下の卓①

②
卓おほふ夕くらがりの中にゐて唸り寄る蚊を手を打ちはらふ③

卓換へて大きメロンを切りにけりわらひさざめく朝めしの後⑩

卓ごとに布白ければ洲の上に分れて寒く書く如きかな⑬

卓白き夜の会場に明あかと灯して彼らの晚餐があり①

卓白き夜の地下室に明あかと灯して彼等の晚餐があり

卓に坐し人立ち去ればその辺りテーブル掛のしみも目に付く①

卓に置く急須の腹に蠟の灯の炎は映り歪み揺るるを⑥

久方 寿満子

白井 大翼

村野 次郎

土岐 善麿

田谷 鋭

西村 陽吉

土岐 善麿

山田 百合子

川島 園子

吉植 庄亮

木俣 修

田谷 鋭

斎藤 茂吉

矢代 東村

中野 菊夫

塚田 菁紀

土岐 善麿

與謝野 寛

磯 幾造

磯 幾造

立花 馨

宮 柊二

卓に置くゆりのかをりの鮮しきけふといふ日の真新に来る①

卓にかけし白き布すら会すめばたたまれてまたあらたなる卓②

卓にさす花は目ざむる美しさ時は移りてゐるかゝぬかも⑦

卓に倚り団子食ひ終へ夢もなく席待つ人に席譲り立つ⑤

卓の上にたれか忘れゆきし夏の手套暗示めきつつ夜の灯にほふ⑩

卓の上に医書と歌集あり蛇の目傘ひろげありわれはながく待たされる④

卓の上に置く時あはれ音はあり南極海の無人島の石⑤

卓の上に摘み来し薔薇をことごとく散らさむ紅の眼に痛き色

卓の上のいんどりんごは肩張るもこけたるもありてそれぞれに愛し④

卓の上のグラスをとりて祝はんはに若き君らの清くやつるる①

卓の上の香の木の実にやはらげる瞳むけ合ふ相別れ去なむ②

卓の上の珍の「アスカ」に眼を細め喜ばれたるみ顔いま浮ぶ③

卓の上の壺を埋むる薔薇の花幾瓣をかさね咲きてあるにか

卓の上の灯を細々と譲りをり今にして風よ吹き消すなゆめ②

卓の上の白布に散る木屑のあはれなりければ手にあつめけり①

卓の上浄めて据ゑぬ剃刀のあとあたらしき妙章尼の像②

卓のうへけさもあはれなり匙もちて馬糧にも似しかたまりを食む⑥

卓の上に溢れし酒をひたむきにねぶりつつ居りこの蠅の虫①

卓の上に起きてゆきたる桃一つ灯を消してより夜ただ匂へり②

卓の上に剣を投げしつはものら吾が酒杯を奪るや早飲む⑬

卓の上に肱さへつきて清燈の灯かげに顔を近か近か語る④

卓の上に今宵かざりし白菊とカーネーションに白梅も添へて⑤

卓の上に置きかへしはなしやくなげの明るきにゐて娘に便り書く⑤

小名木 綱夫

中野 菊夫

今井 邦子

植松 寿樹

木俣 修

長谷川 銀作

植松 寿樹

金子 不泣

山田 百合子

武川 忠一

山本 友一

塚田 菁紀

宇都野 研

杉田 鶴子

築地 藤子

水町 京子

木俣 修

福田 夕咲

隅田 葉吉

川田 順

矢沢 孝子

渡辺 順三

朝吹 磯子

卓の上に中華史年表を貼りつけて興亡劇甚の念を惜しむと⑧	斎藤 茂吉
卓の上に椿一輪落ちしかば盛れるりんごの上にわがおく②	武井 ひろ子
卓の上に壺はきびしく静もりぬ黒く大きく影を背負ひて	碓井 真樹人
卓の上に桃くれなゐに盛られたり残りしものに広き大書院⑭	松村 英一
卓の上に白柚 ^{ペイ} をおきて果物のもつこの気品見れど飽かぬかも⑩	吉植 庄亮
卓の上の花器にりんだうの花疲れひねもすづく山荘の雨 ^{書坤}	朝吹 磯子
卓の上の小皿に醬油の匂ひつつもやもと悲しわれも女も②	山崎 一郎
卓の上の茶碗の縁を巡りつつあゆめる蠅の見えかくれする ^{新萬葉集四}	杉野 朴
卓の上の白梅すでに咲き終る暖かかりしななくさも過ぎ②	隅田 葉吉
卓の上の白布に散る木犀のあはれなりければ手にあつめけり①	築地 藤子
卓の上の壺を埋むる薔薇の花幾 ^{いく} 瓣 ^{ぼん} をかさね咲きてあるにか	宇都野 研
卓のうへ物あれば物ら寄りながら小さき蟻 ^{あき} はいたく活潑なり②	寺沢 亮
卓の上にくぐもりこもる石印の幾つ観しよりなぎぬるところ⑤	鹿兒島 壽藏
卓のきみがよろこび浴みし外の湯も浴むる人なしに湯気立ちまよふ ^{テラギ故人二}	篠原 志都児
卓の間の植木のを葉そよがせて煽風機の風吹きぬぐりをり	宇都野 研
卓の物平げ給はばと吾よ思へたふときおん身に障りあらんか	宇都野 研
卓の物ほつと箸をつけたまひ老いませるおん身いたはらすらし	宇都野 研
卓の蘭花芽一茎のびいでて今朝は玉なす露ささげもつ②	村野 次郎
卓はデコラ皿は白陶果物は梨それぞれが鈍く冷たく粗い触感⑤	小宮 良太郎
卓ひろくならべて向ふ顔みればさかしげにみなみづから信じつつ⑭	土岐 善麿
卓ひろく夕かげさせば電話機に重くかかて聴話器黒し④	宮 柊二
卓を据ゑ原子炉の前のひとりの座日曜なればしんかんとあり⑤	植松 寿樹
訪ね来しわれらが数に花かざり卓あり白き布をひろげて②	中野 菊夫

訪ひ来し吾子兵なる吾子の軍帽は卓の上に正しく置かれてありぬ④	朝吹 磯子
ただかくてあらば見るべき心なりへだての卓のなつかしき花③	中原 綾子
畳のうへに卓をかこみてわがどちと語りむつびぬ宵ふけにけり①	南原 繁
棚の上にさばてんの鉢ならべあり長きはのびて卓にとどける④	久保田 不二子
谷川に拾いし石を卓に置きころがる音のありて籠りをり①	村田 利明
旅人の朝のまどに罍粟を置くロアルの岸の石の卓かな	與謝野 晶子
たをたをと卓の油圧機あやつりて少女ありはや暗き片隅③ ^{角川文庫}	近藤 芳美
父と娘と争へば長き夜となり明るき卓に貨幣が光る①	富小路 楨子
つかさ人今し出御とつたふれば臣等うたげの卓につき並む①	金子 元臣
疲れたる身を卓によせさよふけにすする支那茶の茉莉のかをり ^{新萬葉集五}	富岡 とし子
つかれつつ春の浅夜をわが寄りしカフェの卓の油菜のはな①	三 苫 京子
つきつぎに卓のスタンド消しながら少女帰るゆく靴響かせて	三 国 玲子
月のある庭に卓置きてちかづけば白桃の香はやさしかりにき⑤	生 方 たつゑ
月の雲にしげきゆききより眼をかへし卓の林檎の青きを手にとる ^{山 陵}	小宮 良太郎
土の上の卓にともしきらふそくのひかりのかげにきみがおも見ゆ	原 阿佐緒
つつましくひと枝いけたる夜の卓に菊あらはしぬ如意輪の顔⑬	與謝野 寛
常坐る卓のあたりに朝の飯夕の飯を盛りて置かしむ②	村田 利明
頭 ^ツ の上ゆ鴉は利声を投げにけり野天の卓に煮ゆる鍋の物	宇都野 研
つばさ鳴らししごと卓 ^{つく} におりきたる小 ^こ 鴿 ^か に対す昼のしづかさ⑪	金子 薫園
妻子らとかこめる朝の卓のうへ鎌倉トマトは真白き皿に⑪	金子 薫園
夫の茶碗いつまでも卓に伏せてあり更けゆく電灯の光をはじく②	山田 百合子
摘まれ来て露の乾かぬしもつけの花の卓 ^{つく} の山の朝 ^{あさ} さん⑭	與謝野 晶子

露気立つこよひとらへし白灯蛾しらひとりのこなをちらせり吾が卓のうへ⑤
 停車場の待合室の大きな素木しらきの卓にわが手紙かく④
 停電の今し解けたる夜の卓油にひかりさんま焦げたり⑫
 手折り来し山牛蒡の実のくれなるは朝の卓に光りてしづけさ
 哲也してかきし図案をひろげをりにぶき光のさす卓の上②
 田園調布サロンの卓に玉川の鮎あり鮎より味濃き夫妻②
 電灯をおろして寒き卓のうへ活字の位置を目つむり思ふ⑤
 電灯を目玉になせる竜と虎の画壁のもとに種痘の卓を据う①
 ドーナツのやや脂こき味覚など秋はかなしき夜の卓かな①（新萬葉集八）
 遠く来て子と会ひ共にもてなざる卓の銀器のしづかなる照り③
 どくだみはさびしき花か一輪の白きが卓のうへにさされて②
 閉ししを覗くに大きな室のなか洋灯ランタナと壺と古りし卓の上①（雪夜）
 訪ひ来し吾子兵なる吾子の軍帽は卓の上に正しく置かれてありぬ
 ともしびを受けてはなびらの影深きばらの一花夜の卓にあり②
 友ひとり酔ひて羨しも卓の上に鯖の刺身のあかく寒けさ
 トランプの王われを見つめて白昼の卓の上ただ一枚なりき③
 取り置きて忘れし眼鏡卓の上にさみしき光宿してゐたり③
 取り出して位牌をかざる卓の上父はあはれと吾を見まさむ⑩
 とりたての香ひをよしと海苔を焼き卓に置きつつ朝餉にぎはふ
 とりなきむ言葉もなくて卓を立つ吾に注ぎ来る子の眼妻の眼②
 亡き人を口に言はねど夜の卓にうからみながら寄れば思ほゆ（新萬葉集二）
 ましろなる孔雀の少女卓に来て君と物えふ憎しめでたし（夏よる秋）
 何のため何に向ひて生きなむか卓に鎮もり匂ふ冬薔薇③
 何もなき紫檀の卓に向ひ居てほほえみ合へり幸福と云ふは①

鹿兒島 壽藏 前田 夕暮 尾上 柴舟 佐佐木 治綱 中野 菊夫 井戸川 美和子 鹿兒島 壽藏 加納 小郭家 矢代 東村 高橋 希人 藤森 朋夫 西原 重敏 朝吹 磯子 山田 百合子 村野 次郎 久方 寿満子 村野 次郎 松村 英一 川久保 俊一 高橋 城司 安孫子 善一 與謝野 晶子 清水 乙女 立花 馨

涙ぐむ心に絡みゐるとき嘸ききこゆ隅の卓より②
 波に吹く風を涼しみ夕かけて見るに堪へざる松蔭の卓⑨⑩
 汝の眼といまであひなば泪せむまなこをとおし卓にむかへり①
 賑しき夕餉の卓に坐るすらころぎたなきものに思ひぬ①
 にじむごと赤きシェードの灯がつけば映せる卓を細き手が拭く③
 庭の上に卓をもちいでよべの稿かきつぐあさのあさがほの花（きんぎょ）
 庭の卓の灰皿に水満たし置くに小鳥ら来てはくちばし入れつ
 猫の仔が蛙くはへて来しことを話題としをり夕餉の卓に
 箸はこぶ一人の卓にカリホルニヤポピーの花弁微動しやまぬ⑥
 はしやげる卓を隔つる護謄の木のみづからがもつ暗きしづまり②
 芭蕉葉の大葉の風のそよめかす香ひもすがし卓の雲片⑦
 外し置く卓の眼鏡に戦地より持ち帰りたる佛像映る⑥
 華やけど少し寂しきアマリス（オモ）背きて咲けり卓にある日も①
 パパイアの断面、白い皿の上に躍る、濃いえび茶（つぐ）の卓かけは日光の渦
 ⑫
 パパイアをわれ食はむとすがすがし朝（あ）の卓に黄なる匂の⑤
 ばらの花匂へる卓に苺食べ今のうれしき姉のいひます
 張り替えし障子の反射いちじるき夕餉の卓に先づ吾が坐る⑦
 春雨は降るか降らじか紅茶のむ大理石の卓にややしめりあり⑩
 春やうつつ良寛が毬とみかうみ掌（て）にのせつまた卓に置きみつ（多磨）
 晩餐の卓にかならず酒盞を備へる家族の悪習は厳罰に処さねばならぬ
 ⑥
 晩餐の卓の上なるあつものに心冷えたる身ははやくよる④
 晩酌を禁められて対ふ卓の上鍋はしきり泡だちて煮ゆ⑤

山崎 一郎 尾上 柴舟 小名木 綱夫 田中 四郎 横田 専一 和田 山蘭 鈴木 光子 荒川 一枝 朝吹 磯子 初井 しづ枝 太田 水穂 宮 柊二 近江 満子 金子 薫園 斎藤 茂吉 林 圭子 菊池 知勇 今井 邦子 久保井 信夫 西村 陽吉 尾上 柴舟 植松 寿樹

番茶濃く入れて廻しぬ健かに三人揃ひし朝餉の卓に①

日すがらの雨は夜となり卓のうへに泥乾きつつ猫のあしあと②

ひとつそりとわが思ひ出の中に生く喫茶の卓の古河さんの顔①

人いとふおもひにいつか夜ふけて卓の上に蘭のしろたへの花①

人殺しの記事がありともおどろかず夕刊を畳み卓の端におく⑥

ひとつきはわれも受けつつやがて今乱れむとする卓をはなるる②⑩

匪となりて生きてあらめと低くいふ陸の地図ある卓に寄りつつ⑥

人もだして真昼の海を眺めをり卓の上なる黒き手袋（銀の襪）

灯ともりし夕べの室に光るもの妻が置きたる卓の上の義齒②

ひとりなることが楽しくビール飲む卓にわが顔に木洩れ日ゆらぐ②

ひなげしは卓に置く時の云ひぬ淹のごとくに涙なると⑫

日の当る卓に緑に透ける海苔美しくしてひとり昼餉す③

日のあるうち来しまま障子の外も見ず卓囲み遊び時たつ速し⑦

ひび入りし白磁の皿の紅いちごのこりて卓に灯のあかきかな

表情をほぐさぬ人とさし対ふ卓広くして灯をかへすつや④

ひらめきし稲妻のなか卓に置く指太きこの消極の掌よ⑥

昼暑き障子閉ざして何すとか卓の薔薇は褪せて久しき

ビル建てむもくろみ読める卓の上ヒヤシンスの花甘く匂ひて⑦

ふかし薯と飴とチョコレート卓にありて帰ってきたりし児を坐らしむ④

吹かれ来るかまきりの仔ら淡あはとすき透り立つ卓のともしに⑤（角川）

文庫

ふたたび雲よりいでてさす月は卓の玻璃器に青くとどけり（山後）

ふとしては食後の卓におしだまり澄みゆく朝の空を仰ぐも

舟形の花器に盛られて咲ききれる紅白の牡丹卓にゆたけし②

萱沼利子

千代国一

沼波美代子

上代皓三

松村英一

土岐善磨

木俣修

佐佐木信綱

隅田葉吉

山崎一郎

與謝野晶子

山田百合子

長谷川銀作

金子薫園

鈴木康文

宮柊二

久保井信夫

岡野直七郎

村田利明

近藤芳美

小宮良太郎

土岐善磨

高橋希人

古くよりたたへて佐久の鯉といふ今宵の卓に鯉のあらひあり②

ほそぼそと吾が卓の灯に一夜ゐる蠟燭にしてその雄を食ふ①

ホテルあり海を写せる鏡面と黒くつやだつ一つの卓と③

まかれたるビラひろひきて卓にあり君もまた君も手にとりてよむ②

まことにも空穂先生のみ声ぞと朝餉の卓の箸おきて聞く①

ましろなる孔雀少女の卓に来て君と物云ふ憎しめでたし

マスカットの青きを卓に探りゐる老い父が顔みしむるなかれ⑤

窓ガラスきらめく昼を負数多き数式あまた卓に散らせり②

窓ぎはの卓のうへなるひとつ鉢蘭に日没りし窓ふかくみゆ②

窓に春陽明るき卓に顕微鏡のぞきころむ心ほぐれつつ①

間なし妻わが誕生日忘れ居り夕餉の卓に言ひ出でて笑ふ①

稀にしもわがありてそろふ夕餉なり賑ふ卓にしたしまむかな①

満洲よりここに来れる若者は叫びて泣くも卓にすがりて③

みがかれし卓にそひつつ近よれば黒き手袋のまま待ちくるる②

見かへれば壁の鏡はうつすなり勞れたる人卓にむかへり（権の木）

見知りなき人の詰める玄関口弔問の刺の卓にうづ高し②

水かへて卓におきたるシヤシンス新青太芽今ぞほぐれし

みそにつけて冬はくふべきはやとより卓にならべてしばらく眺む②⑩

見つむれば卓の白布白々と兄のおもわの目に浮びきぬ⑥

み手も触りおん衣も触りてかしこきろ潮見しましけむ自然木の卓②

緑児が身をささへ立つ掌紫檀の卓の面雲らす①

み墓所の定まれりとふ小さき記事一隅によみ夜の卓を立つ①

見もなれぬ一つの部屋に卓据ゑて師は厳しく坐り給へり①

みやびをがつくり笑もおもしろし卓に紅茶の高くかをれば①

中野菊夫

富小路禎子

久方寿満子

中野菊夫

川浪磐根

與謝野晶子

遠山光榮

久方寿満子

臼井大翼

荒木暢夫

川浪磐根

塚田菁紀

斎藤茂吉

中野菊夫

佐佐木信綱

川島園子

宇都野研

土岐善磨

尾上柴舟

臼井大翼

窪田章一郎

岩上とわ子

山田百合子

吉井勇